

アジア諸民族の文化の遺伝子に感応する…

人間は光に向かって歩みつづける。だが、未来に向かう「前方への一步」に気をとられるあまり、「後方の一步」、つまり、それまでの歩みや過去の遺産を忘れがちだ。

ふりかえてみると、千年二千年、あるいは万年の単位におよぶ歴史の積み重ねこそが自分の身体を形成している。日本の民俗・文化の底流には、中国的なもの、韓国的なもの、インド的なもの、さらには東南アジアの民俗・文化が流れこんでいる。歴史をぐっと押し戻して意識を深め、話題を探ってゆくと、中国人も韓国人もインド人も、そして日本人も、みな深い共通性をもっていることに気づかされる。

アジアに行き、アジアを体験し、アジアの人びとと話すときにいつも感じることは、すこし時間を巻き戻し、対話や感性のレベルを調律してゆくと、豊かな共通性が認識できるということだ。それを土台にして奥行きのある対話を交わし、たがいの結びつきを深めることができる…という体験も少なくない。

改めて考えてみると、中国も韓国もインドも、日本という国の基層文化の形成に深いかかわりをもっている。「インド」は「仏教」を通して、あるいは「インド特有の哲学や宇宙観」などによって、古代の日本に強い影響を与えた。「中国」からは、私たちが日常使っている「漢字」をはじめ、「国家や文化の基礎をなす多くのもの」が、人とともに日本へと流入している。また「韓国」の場合も、「奈良、平安期の文化形成の多くのもの」が、朝鮮半島の人びとの手を借りてなされたといっているほどである。さらに太平洋環流は、東南アジアほかの地域の豊かな文化をその流れに乗せて運びこんだ。つまり日本人の血脈には、「アジア諸民族の文化の強力な遺伝子が流れこんでいる」…といえるだろう。

生命力にみちた造形語法をどのように継承し、発展させるのか…

いまアジアは、激動する世界潮流のなかで、大変身をとげようとしている。とりわけ中国、インド、韓国は目を見張る進展を見せている。シンガポール、ベトナム、タイ、インドネシアもこれに続いている。先進国といわれる欧米諸国のライフスタイル、物質的な繁栄を求めて開発につ

ぐ開発をすすめ、グローバル化が加速する。アジアの人びとが前方に向かって踏み出す一歩が、強い乱流をまきおこす。

だが、自然環境や伝統文化を破壊し、ひいては地球を破滅に導くおそれも懸念される「現在の前進」をこのまま続けてよいのだろうか。より調和ある未来の建設に役立つかもしれないアジア古来の智慧や、精神性を忘れ去ってよいのだろうか。日本が「記憶バンクとして無意識に蓄積してきたアジアの文化・思想」を、今こそアジアの人びととともに吟味しなおすべきではないか。

とりわけ、「名もなき人びとが日々の生活のなかで造りあげた大自然と共存する豊かなデザイン」、「神と人、人と人を結びつける祭礼のダイナミズム」などに代表される、ぬくもりあるカタチをどのように継承し、生命力にみちた造形語法をどのように発展させ、未来につなげてゆくべきか…。

「未来に向かう前方の一歩」に、「よき文化遺産に支えられた後方の一歩」を重ねあわせる。デザインの力を軸とし、アジアの若者たちの智慧と力を交えて再考する。アジアデザインの伝統を継承し、発展させうる若者の力を育ててゆく。

アジアデザイン研究所の果たすべき役割は、このようなものだ、と考える。

研究の主題…

- 1——「アジア共通のデザイン語法」を探る。デザイン語法に潜む意味・象徴性を探る。
- 2——アジアのデザインに反映されている古来の「宇宙観・自然観」を探る。
- 3——アジアのデザインが「人びとの日常生活や祭礼をどのように活性化しているか」を探る。
- 4——アジアのデザイン——伝統と現代。
- 5——民族固有のデザインに潜む「美意識」。民族の物語・神話とかかわる「文様の象徴性」を探る。
- 6——「地域を越えたデザインの流れ」、たとえば、竹細工のデザインの影響関係を探る。
- 7——アジアのデザイン語法を「未来に生かす」可能性。アジアデザインが世界を平和に、豊かにする可能性を探る。
- 8——アジアデザインを「継承し、発展させる人材」を育成する。
- 9——「アジアデザイン学」を確立する。

研究の手法・視点、研究体制について…

- 1——「見えないもの」を、見つめてゆく。
- 2——「対立項」を見だし、対比と融和のダイナミズムを考察する。
- 3——ピンポイント研究ではなく、「重層的・複合的」に対象をとらえる。
- 4——ひとつの主題に、多くの主題(問題意識)を見いだす。
- 5——多くの主題を、ひとつの主題に織りあげる。
- 6——「環境や、心身の問題」と関係づける。
- 7——一人ひとりがバラバラではなく、たえず「複数で補いあう」ような研究体制をつくる。